

部屋に通されて、お茶を飲んでひと息入れてから、二人は、厚手のコートにマフラーをしっかり巻いて、もう一度冬空の下に出た。
てきた。

建物のあいだを縫う急勾配の坂道から、『三丁目通り』というどこか懐かしい雰囲気を通りを抜けて、めざしたのは、『伊香保

ロープウェイ』の乗り場のある『ま^{*13}ちの駅』。ロープウェイの駅名が『不如^{ほととぎす}帰^す駅』なのは、もちろん、徳富^{とくとみ}蘆^{あろ}花^かの名作『不如^{*14}帰』に由来するんだろ^うねえ。

乗車券売り場で往復券を買^うと、乗り場の係員さんが「乗車時間まで、お茶でも飲^んで^てく^ださい」と待合室を案内^して^くれた。暖房の効いたその室内で、無料サービスのコーヒ^ーを飲^むうちに、ゴンドラがや^って^きた。

乗り込むと、四分間で一^気に山の上へ。ゴンドラの中からも景色がよく見えた。

たまたま二人のほかにはお客もいなくて、揺れる窓から外を眺めながら、えっちゃんがぼんやりと言^った。

「なんか……変な感^じ」

「なにが？」

「うーん……説明しづ^らい^んだ^けど、こ^う、ゴンドラの中に入^って、自分^が『運ば^れて^く』感^じが、なん^となく^ね、妙^な気^分」

「……」



*13 まちの駅ふるさと交流館

市営物間駐車場に隣接、伊香保ロープウェイ「不如帰駅」併設。1階に観光案内コーナー（コインロッカーあり）がある。

■年中無休

■開館時間／（4～9月）8時30分～19時（10～3月）8時30分～18時

■住所／渋川市伊香保町伊香保558-1

*14 『不如帰』

明治の小説家・徳富蘆花が国民新聞に連載（明治31～32年）した小説。

里美ちゃんは黙ったまま、しばらく外を眺めていた。そして、「分かるかも。確かに『運ばれてる』わね、私たち」と言った。

「でも考えてみれば、東京でだって、毎日電車に乗って『運ばれてる』のに、今まで気にしたことがなかったわ」

「そういえばそうね。水平に走っていると気にとまらないのかしらね？」
「電車も地下鉄もあまりに当たり前前日常になってて、感覚が鈍ってるのもあるかも」

二人はどこか神妙そうな顔をして、しばらく無言でいた。それぞれ、なにか思うところがあるのかも知れないね。

山の上の駅は『見晴駅』と言った。きれいな駅舎を出て、展望台の方向を示す表示にしたがって、二人は歩きます。

整備された遊歩道を上りきった先に、『ときめきデッキ』という名の立派な木製の見晴らし台が現れて、二人はそこへ上がった。
「すっごくいい景色！」

「遠くまでくつきり見えるわねえ。夕暮れに向かう空の色もいい

な……」

「川が流れてるわ」

「あの山が赤城山かな？ 下のパネルに、山の名前が書いてあったのよ。赤城山のこっちが子持山で、その左が小野子山かな。谷川岳とかも見えるらしいけど、きょうは雪雲の中ね」

里美ちゃんが、後ろを振り向く。

「ねえ、鐘があるよ」

「え？ あ、ホント。……あら、鐘の後ろの景色、見てよ」

「山の頂上が二つあって、鐘がその真ん中にきてるのね。これってわざと」

「多分わざとなんじゃない？ ……なんか、カップルで鳴らすと恋が成就するとか、そういうジンクスができそうだなあ」

「うん、できそう。ホントみんなそういうの好きよね。井の頭公園でボートに乗ると、そのカップルは別れるとか」

「あるわけないじゃないね」

「そうよ、そんなの迷信よ。——で、江利子は、今ここに彼氏と

片岡中将の愛娘・浪子と陸軍少尉川島武男男爵との恋愛を軸に、当時の世相や風俗、思想潮流、人情などを描き出し、大人気を博した。作者の蘆花は伊香保を愛し、『不如帰』中にも伊香保の描写が出てくる。

*15 見晴展望台

伊香保ロープウェイ「見晴駅」から徒歩5分、上ノ山公園内にある。晴れた日には上州の山々、上越国境の山並み、吾妻川、渋川スカイランドパークなどが見える。また、ここに設置されている「ときめきデッキ」は月をイメージしている。

きてたら、この鐘、鳴らすわけ？」

「鳴らすわよ。決まってるじゃない」

「やっぱそうか」

二人はくすくすと笑った。

「寒くなってきたね、江利子。耳まで冷えきっちゃった。宿に戻ろうか」

「そうね。とりあえず温泉に浸かりたい気分」

二人はマフラーに顎あごをうずめて、『見晴駅』までの道に戻っていった。